

† イースター = EASTER (復活祭) とは … †

2018年4月10日 (火)
つのぶえ保育園 (石田)

Easter(イースター)は『復活祭』とも言われる、キリスト教の行事の中の最も大きな記念日の一つです。

2018年前、イエス・キリストは、イスラエルの国のベツレヘムという小さな田舎町の馬小屋で、「聖霊」といわれる神様の不思議な力により、小さな田舎町ナザレに住む一人の処女(おとめ)、マリアを通して、この世に人知れずひっそりと誕生されました。この出来事を覚え、礼拝する日が、『クリスマス』です。



それから後、大人になるまでの間、イエスさまは、大工ヨセフの息子として、平穏に暮らしていましたが、30歳の時、神様からの召命により導かれ、神様の働きを始めました。

(これを“公生活”といいます。) この3年間、イエスさまは今まで生まれ育った土地や家族を離れて、様々な場所へ行き、各地で会う大勢の人々や、そのひとりひとりに励ましや慰め、祝福を祈るとともに生きる力や希望、神様の永遠の愛を力強く温かく示され続けました。

ところが、町に住む人々の中には命の価値や、あるがままの在り方、自由や人間の本質について大胆に説く、イエスさまを好ましく思わず疎ましささえ感じる者がいました。

法律や旧くからの慣わし、地位や名誉や肩書等を重んじる指導者や、頭が良いと自負し、周りから「せんせい!」と敬われている学者達でした。イエス・キリストに関する人々からの噂や称賛を耳にする度“自分達をおびやかす邪魔な存在”となっていき、その想いはいつしか恐れに変わり妬みや憎しみ、傲慢や焦り等の心の醜さを増幅させ、ついには「イエスを殺してしまおう!」と赦し難い恐ろしい計画を立てるまでの心に歪んでいってしまいました。この卑劣なたくらみはあっという間に拡がってしまい、見る見るうちに果てしない数の人々を巻き込んでいったのでした。おびたしい数の群衆と化した人々の無責任な思いは、何の罪も犯していなかったイエスさまを極刑である十字架にはりつけるまでにエスカレートしていきました。この群衆たちのほとんどはついわずか一週間前にイエスさまのことを熱狂的にほめたたえながら、大喜びでついて来ていた者達でした。彼らは、イエスさまのことを大絶賛したその同じ心と口で、今度は責め、あざけりののしり続けたのでした。何一つ根拠のない世の噂に流されるがままに暴走し続けた彼らの姿とその愚かな心は私たち人間の、誰にでも潜んでいる弱さそのもので在ることに気づかされます。

また一方、処罰決定の権限を委ねられた総督ピラトは、イエスさまに直接会い、尋問を繰り返すのですが、罪を見出すことは出来なかったため、釈放を考えますが「殺せ! 殺せ!」と大騒ぎする群衆の勢いを鎮めることは不可能だと判断し、この処罰決定のすべてを、民衆へ負わせるために『責任転嫁』という人として最も卑劣な手段をもって、重要な裁判と刑の執行を行ったのでした。

このように、イエス・キリストが十字架にかかられた原因は、御自身の罪や悪行によるのではなく私達すべての人間が本来持っている、心の弱さや醜さ、汚さによるものであったことがわかります。

自分以外の 他の人に対する 嫉妬、劣等感、怒り、嘘、虚栄、陰口、無責任、無関心、無視、暴力暴言、疑心、不信・・・、これらはどれも、私達人間の心に内在している悪であり、大きな罪です。誰もが持つ、この どうにもならない汚れた心こそが、その人の本質をも失わせてしまう恐ろしさを抱えていることを思われます。遙か昔の この十字架の出来事は、それぞれの心に対する戒めに改めて気づかせてくれることを感じています。

イエス・キリストは、このように 罪深い心を持つ この世の すべての人間の 身代りとなられて 金曜日の午後、人としての生涯を ついに閉じられました。イエスさまが十字架上で祈られた言葉に「父よ、彼らをお赦してください。彼らは何をしているのか自分でわからないのです(ルカ23:34)」と聖書に記されています、自分のことを否定し なじる人間達のことを 自身の最期の時に至るまで 想い、赦し、神様に祈り続けられました。その心は どんなに深い 悲しみで溢れていたことでしょう。他人のために 自らの命を捨てること、自分を死に追いやった 相手のために平安を祈ることなど、私たち人間には 到底 出来ません。赦すことがどんなに困難であるかも痛感させられる出来事です。

亡くなられた後、今までそばにいた弟子などの身近な者達は イエスさまの遺体を お墓へ丁寧に 葬り、大きな喪失感の中で 心細さと絶望感に襲われながら、それぞれに時をやり過ごしていました。それから3日後の 日曜日の朝早く、女の弟子達がお墓に行ってみると、そこには 遺体を包んだ 白い布だけが残されていました。まもなく 天の御使いから『彼はここにはいない、生き返られた』と 告げられたので、急いで 他の仲間たちのもとへ戻り その出来事を ありのままに 伝えました。それを聞いた他の弟子達は 当初、この事実を なかなか信じられず、受け入れられませんでした。その直後 手の平の釘の跡や お腹の槍の跡を見せて 現れたイエスさまの姿を 目の当りにした時 よみがえりという この事実を 畏れ 驚きつつも 心から喜んで『神の子キリスト』を確信しました。
(新約聖書 『マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネ福音書』 記述より)

キリスト教は、イエス・キリストの この復活の出来事によって 始まった宗教といわれています。その意味でも、『イースター』は 最も意味の深い大切なお祝いの記念日であり、クリスマス以上に『信じる』ことをまっすぐに問われる出来事だとしみじみと思わされます。

なお、このイースターという祝日は、クリスマスのように 日にちが固定された 祝日ではなく【毎年 春分の日(後の)の満月の夜の 直後の日曜日】とのルールで決められている『移動祝日』です。今年(2025年)は4月1日(日)に 全世界のキリスト教会において 主の復活をお祝いする礼拝が行われました。つぶえ保育園では、先週の6日(金)に、イエスさまの十字架の苦しみに心を馳せる受難礼拝、そして 深い悲しみの死の闇に打ち勝った 復活のお祝いの礼拝を 今朝 全クラスで 献げました。

子ども達は皆『イエスさまがもう一度生まれた(生き返られた)』事実を ありのままに 受け入れ その 不思議な出来事の話をとて真剣な表情で、一心に 耳を傾けていましたが、イエスさまが よみがえられたことを とて喜び、ホッとした表情で友達と笑い合っていた表情が印象的でした。『今も そして これからも 永遠に生きて働き 見守っていて下さる いつくしみ深い神様の御手に すべてを委ねながら、子ども達と共に 天を仰ぎ 心豊かに歩いていきたいと 改めて 思っています 世界中のすべての人々の上に 神様からの あふれる愛と平安と祝福を 心よりお祈り申し上げます。

★世界中のキリスト教の教会や施設では、イースターを祝し『イースター・エッグ』が 配られます。これは“硬い殻に包まれ 動かない卵は、一見 死んでいるように見えるけれど、やがて 新しい命が生まれるという様子が、まさに死を克服し その闇に打ち勝つ 復活”というイメージに重なったと言われています。つぶえからも 可愛い卵のプレゼントを させて頂きます。ぜひ、各御家庭でも この命の復活の出来事に お心を馳せて頂ければ 幸いです★ 主イエスキリストの 愛とともに★